

特集

原発過酷事故を
倫理的・道義的に考える

中野貞彦

幸四郎の家から程近い場所に暮らす50代の男性が割腹自殺したのである。2011年11月末のことだ。「死ぬ数日前に電話で話したんだ。その時は、そんな気配はなかったんだけどな」。男性は独身で、庭先で菊の花を育てるのが趣味だったという。県内の避難先から、赤字木にある自宅に戻り割腹自殺したのだ。——これは、矢木澤高明氏が浪江町津島地区の今野幸四郎氏（75歳）を密着取材した写真集『フクシマ物語 幸四郎の村』（新日本出版社、2012年）に書いている話だ（p.77）。そして並べられた遺骨の写真には「原発事故後、亡くなった人びとの遺骨。墓に埋葬することもできず、寺の中にそのままになっていた。この一年で35名の方が亡くなった」という説明があり、福島第一原発の事故がいかに過酷な災害をもたらしているか、突きつけられた思いがした。

いま、避難指示区域からの避難者は約8.1万人、福島県全体の避難者は約14.6万人にのぼる。故郷に戻る、戻らないにかかわらず、一人ひとりの人が突然に人生の希望を奪われ、一方的な犠牲と苦難を強いられ、これからの見通しも不透明な状況下におかれている。犠牲になった方も多い。被災者は財産・住居・仕事・団らんを失い、地域の経済・産業、コミュニティ・伝統、教育・文化、医療・福祉、自然・環境、行政サービスなど、すべて破壊された。しかし、原発事故に責任のある東電と政府は、被災者の立場にたった賠償と補償と施策をないがしろにしている。倫理的にも道義的にも許されないことだ。そのなか

で多くの人が、人間らしい生活を取り戻すために、人間の尊厳をかけて、さまざまな形で共同してたたかっている。倫理と道義と正義が貫かれる社会にするための草の根の壮大で歴史的なたたかいと言える。

資本は本質的に、社会から強制されなければ「倫理的」にはならない。企業は、何が正義かを知って「企業の倫理」を掲げ、隠れ蓑にしている。泥棒が姿形だけでは本質が見えないのと同じである。

東電、政府、原子カムラといわれる利権集団、さらに科学者・技術者についての倫理的・道義的な面からの態度を追及し明らかにしていくことは、きわめて現実的な課題であって、具体的・本質的でなければならず、そこでは追及する側の倫理・道義・正義も問われる。そして「倫理的・道義的に考える」ことは、国民一人ひとりの責務でもある。

牧野広義論文は、ドイツ社会の倫理的・道義的な規範が国民による論議によって形成されていることを明らかにしている。

谷江武士論文は、東電の経営分析をとおして国費投入と電気料金の問題点を浮かび上がらせており、今後の追及が大事である。

青水司論文は、科学者の社会的責任について、科学と技術を歴史的に振り返って、鋭い批判と論考を行っている。

島蘭進論文は、低線量被ばくへの健康影響について学会の委員会と委員の態度を追及して、その本質の役割を明らかにしている。

（なかの・さだひこ：東京支部、本誌編集委員、電子工学）